

ヨハネ第一1章1-4節 「御子にある神との交わり」

1A いのちの証し 1-2

1B 肉体を取られた方 1

2B ヨハネたちの証し 2

2A 御父と御子との交わり 3-4

1B ヨハネたちとの交わり 3

2B 満ちあふれる喜び 4

本文

ヨハネの手紙第一を開いてください、私たちは前回、手紙全体に書かれていることをふまえた、導入を学びました。一節ずつ見ていきたいと思います、今晚は 1 章 1-4 節です。「¹初めからあったもの、私たちが聞いたもの、自分の目で見たもの、じっと見つめ、自分の手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて。²このいのちが現れました。御父とともにあり、私たちに現れたこの永遠のいのちを、私たちは見たので証して、あなたがたに伝えます。³私たちが見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えます。あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父また御子イエス・キリストとの交わりです。⁴これらのことを書き送るのは、私たちの喜びが満ちあふれるためです。」

1A いのちの証し 1-2

1B 肉体を取られた方 1

ヨハネは、主イエスについて語り始めます。その始まりは、「初めからあったもの」です。福音書でも、「1:1-2 初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。」とあり、「初め」という言葉から始まっています。

聖書は、どこが最も早い時期のことを書いているか？と聞かれたら、創世記 1 章 1 節を上げる方が多いと思います。「はじめに神が天と地を創造された。」です。けれども、よく見ると、神が天地を創造されたという初めについて語っていますが、ヨハネ 1 章 1-2 節は、それよりも前のことを語っていることが分かります。天地を創造する前からの存在について語っているのです。永遠の昔から生きておられる方で、この方がおられなかった昔は存在しません。イエス様は、人々に捕らえられて十字架に付けられる前に、こう祈られました。「ヨハ 17:24 父よ。わたしに下さったものについてお願いします。わたしがいるところに、彼らもわたしとともにいるようにしてください。わたしの栄光を、彼らが見るためです。世界の基が据えられる前からわたしを愛されたゆえに、あなたがわたしに下さった栄光を。」世界の基が据えられる前、つまり天地が造られる前に、すでに父が子を愛しておられて、ご自分の栄光を与えておられたということです。そして、ご自身を信じる者に、そ

の栄光を見ることができるよう、ともにいるようにしてくださいと祈られています。

そして、永遠に生きておられるからこそ、すべてのものはこの方によって造られたことが分かります。福音書では続けてヨハネは言っています。「1:3 すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもなかった。」世界もそうだし、この自分も主イエスによって造られたということです。ヨハネは、世にいる人の一つの皮肉をこう言い表しています。「ヨハ 1:10 この方はもとから世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。」自分を造られた方を知らない、という皮肉です。自然界を見ても、自分の体を見ても、そこに造り主がおられることが証しされていますが、それを認めないで、思いを暗くして、この方以外のものをもっと大事にする、偶像にする愚かさを人は持っています。バビロンの最後の王、ベルシャツアルに対して、ダニエルが言いました。「ダニ 5:23(あなたは)、あなたの息をその手に握り、あなたのすべての道をご自分のものとされる神を、あなたはほめたたえませんでした。」私たちに起こる問題は、結局は、自分の造られた方を神とせず、他のものを神としてしまっていることによることが分かります。

そしてヨハネは、この方が肉体を取られたという奥義を語っています。福音書でも1章14節で、「ことばは人(肉)となって、私たちの間に住まわれた。」とありますが、第一の手紙では、とても具体的に、イエス様が肉体を取られていたことをヨハネは証言しています。「私たちが聞いたもの、自分の目で見えたもの、じっと見つめ、自分の手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて。」

ヨハネたちは、自分たちで願望していたものを勝手に心の中で聞いていたのではありません。肉体を取られたイエスが、その肉声をもって弟子たちに語りかけておられたのです。そして、「自分の目で見えたもの」と見えています。続けて、「じっと見つめ」と、見ることのできる方であったことを証言しているのです。この前、お話ししたように、教会の中に異端の教え、手紙の中では「反キリスト」と呼んでいますが、グノーシス主義がはびこっていました。それは、イエス様が肉体を取られたのではなく、現れたように見せていただけだ、という立場を取っていました。仮現説と言います。英語に訳せば、まさにバーチャル・リアリティーです。しかし、ヨハネは、確かに見て、じっと見て、また見えていたのです。

さらには、「自分の手でさわったもの」であります。ヨハネは、イエス様がいかに肉体的にもすぐに近くにおられたかを表現しています。今でしたら、社会的な距離とか言って、感染してしまうよ、と言われるような濃厚接触です。(笑)「ヨハ 13:23 弟子の一人がイエスの胸のところで横になっていた。」とあり、最後の晩餐で、イエス様の胸のところに自分がいたほどです。そして、イエス様がよみがえった後に、トマスはイエス様から、「20:27 あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしの脇腹に入れなさい。」とされています。これで確かに、夢でも幻でもなく、初めからおられ、万物を造られた方が、肉体をとって現れたことを証言しています。

そして、「すなわち、いのちのことばについて。」と言っているのです。主ご自身が命であられ、またその言葉が命であるということを証言しています。主が実在しておられ、この方を信じて生きることも、また互いに私たちが交わる時も、主がリアルであられるように、リアルな中で信仰生活を送るのだということです。前回、当時の教会の問題が現代にも繰り返されている話をしました。私たちの信仰に、実体がなくなっていることです。単なる言葉や文字でしか関わりのない交わり。「教会は建物ではない、私たちが教会だ」と言いながら、集まるのを止める人々。主が肉体をもって現れてくださったのに、私たちが行いにおいて、目に見える形でその信仰生活を表すことができていないということは、受肉されたキリストを、口では敬いながら実を否定してしまっていることになり危険についてヨハネは話しています。

単なる「ことば」ではなく、「いのちのことば」なのです。この方にいのちがあり、またこの方の語ることばにいのちがあります。「ヨハ 6:63 わたしがあなたがたに話してきたことばは、霊であり、またいのちです。」何か、「心の中で安心しました」とか、また、「とてもよく分かりました」とか、もちろん感情や知性の部分で刺激を受けることはあるでしょう。しかし、主は私たちの命そのものに関わってくださいなのです。この方によって、自分は生き、この肉体は滅んでも、また新たな肉体をもってよみがえるのです。イエスを信じているということは、イエスが生きていることを、反論ができないほどに証しとして持っているということです。

2B ヨハネたちの証し 2

²このいのちが現れました。御父とともにあり、私たちに現れたこの永遠のいのちを、私たちは見たので証して、あなたがたに伝えます。

イエスという方に、またこの方のことばに、いのちが現れました。その「いのち」の特徴を、今、ここで話しています。「御父とともにあり」ということです。福音書の中で、「ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。」とありましたね。いのちというのは、独立して存在しているものではありません。結ばれているからこそ、生きているのです。御子が御父とともにおられるところにある、その関係と交わりにいのちが流れています。ここが、多くの人が間違えることです。イエス様は、永遠のいのちを泉から流れる水にもたとえられました。流れてなければ、動いていなければ生きていないのです。イエス様が御父との交わりをして、そこに流れているものが「いのち」であります。福音書には、何度となく、主がいかに父と交わっているかを話しておられました。「ヨハ 5:19-20・・子は、父がしておられることを見て行う以外には、自分から何も行うことはできません。すべて父がなさることを、子も同様に行うのです。それは、父が子を愛し、ご自分がすることをすべて、子にお示しになるからです。」

そして、「私たちに現れたこの永遠のいのち」と言っています。ここから、「永遠のいのち」とは、単に永遠に長く生きることを意味しているのでは必ずしもないことが分かるでしょう。量ではなく、質

なのです。永遠のいのちとは、御父にある御子のいのちそのものです。この方は、今見たように、永遠の昔から生きておられるので、この方を知ること自体が永遠のいのちにあずかることを意味します。「ヨハ 17:3 永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知ることです。」

このことが私たちに現れて、「私たちは見たので証して、あなたがたに伝えます。」と言っています。グノーシス主義者らは、知識をもって議論をして、語っている内容を言葉による議論の対象として言い争いをしかけてきます。けれども、ヨハネが語っているのはそんなものではありません。証しとあるように、証言しているのです。議論の対象ではありません。自分が見たこと、聞いたことを証しています。私たちの交わりは、このようにして自分に現れた永遠のいのちを証し、伝えるのであって、説得するものではないのです。

2A 御父と御子との交わり 3-4

そして、ヨハネは手紙を読んでいる人々に、この交わりに入るように招いています。

1B ヨハネたちとの交わり 3

³ 私たちが見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えます。あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父また御子イエス・キリストとの交わりです。

この前学んだように、ヨハネは手紙の中で、明確にこの手紙を書いている目的を書き記しています。ここでは、「あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。」ということです。ここで言っている「私たち」とは、イエス様が地上におられた時に共に過ごした使徒たちのことを主に指しています。そして、使徒たちの教えを堅く守り、その交わりの中に、時と場所を越えても共にいる人々のことを指しています。イエス様が、捕らえられる前の直前に、次の祈りを献げていました。「ヨハ 17:17-18 真理によって彼らを聖別してください。あなたのみことばは真理です。あなたがわたしを世に遣わされたように、わたしも彼らを世に遣わしました。」共にいた弟子たちが聖別されて、真理によって守られて、世に遣わされると言っています。彼らが、御子にある交わりを真理によって堅く保って、そして使徒たちによってご自身を信じていく者たちも、その交わりの中に保たれるということなのです。

しばしば、プロテスタントの教会は、カトリックや正教会に対して批判をする時に、「教会が人を救うのではない」と言います。確かにその通りです、教会にいても救われるということを保障するものではありません。幼児洗礼を受けて、大人になって神を信じない、無神論者だと言っている人が、それでも救われているとは思いません。しかし、古い教派の人たちが大切にしていることには、真理が反映されています。それは、使徒たちの教えたことを、言い伝えていかなければいけない。教会は、使徒たちの權威の継承なのだということです。私たちは、使徒たちの教えが聖書にあり、そ

こにある真理に留まることによって、使徒たちとのつながりを保っていると信じていますが、それであっても教会を神が建てておられ、そこにある交わりがあってこそ、神に与えられた命なのです。ですから、確かに教会が人を救うではありません。イエス・キリストが救うのです。しかし、教会を通して救われるのです。

「交わり」とは、とても訳しづらい言葉です。コイノニアと言いますが、まずは友の関係に近いものがあるでしょう。つまり、「なんでも明かす関係」です。自分の弱い部分は、そう簡単に相手に見せることはありません。けれども、友であれば、その人に打ち明けますね。共に分かち合う仲です。そして、「結ばれている」仲です。つまり、自分は自分だけでなく、自分は相手とつながっているということです。教会は、キリストのからだに例えられています。自分は足であって、相手は手であっても、足と手は別々に存在しているのではなく、連結していて、連携しています。ですから、自分の身に起こったことを報告すれば、それを聞いた人は他人のこととは思えず、まるで自分のことのようにして共有するのです。「I コリ 12:26 一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに痛み、一つの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶのです。」そこで、この前、使徒の働きで観たように、自分の所有のものを自分のものと主張せず、それを一つにするように、分け合う、共にするということがあります。そして、共に労するというのもあるでしょう。福音の働きのために、主にすべてを献げて、共に労するところに、貴い一体があります。

こうした「私たちと交わりを持つようになるため」とありますが、ヨハネは、もっと厳密に言い換えて、「私たちの交わりとは、御父また御子イエス・キリストとの交わりです。」と言っています。交わりといっても、人と人の付き合いではなく、あくまでも「御父また御子イエス・キリストとの交わり」をもって、互いに交わるのです。子が父と交わっておられるように、その交わりの中に私たちを招き入れています。「ヨハ 17:21 父よ。あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちのうちにいるようにしてください。…」

この前にも説明しました、私たちのイエスに対する信仰と、教会にいる仲間は切り離せません。人に対しては異なる自分を見せて偽善になっても、教会においては、神との関係が露わにされず。神への献身と礼拝が、互いに交わりによって明らかにされてくのです。ですから、神への信仰はあるが、教会に対する信頼はないと二つを別物のように分けていくのは間違っています。神を愛しなさいという命令を出されて、そのすぐ後に隣人を自分自身のように愛しなさいと言われた、そのつながりがあります。ヨハネは、神との交わりと互いの交わりが切っても切り離せないことを、第一の手紙で、「兄弟を愛さない者は、神を知らない」という言葉などを使って説明してきます。

私たちが互いの交わりにおいて、実はそれが、御父と御子の交わりなのだということを示す、最も深い部分は、キリストのからだに血にあずかる聖餐です。「I コリ 10:16-17 私たちが神をほめたたえる賛美の杯は、キリストの血にあずかることではありませんか。私たちが裂くパンは、キリス

トのからだにあずかることではありませんか。パンは一つですから、私たちは大勢いても、一つのからだです。皆がともに一つのパンを食べるのですから。」キリストのからだ自分がパンを食べることによって、自分のものとなります。そしてキリストの流された血が、ぶどう酒を飲むことによって、自分の一部になります。それと同時に、同じパンを裂いて食べているので、共にキリストのからだにあずかっているのです、一つになることができます。同じぶどう酒の杯を交わすので、それが体内に入ることによって、キリストの流された血によって一つになっています。

2B 満ちあふれる喜び 4

⁴これらのことを書き送るのは、私たちの喜びが満ちあふれるためです。

ヨハネは、ここでも手紙を書いた目的を書いています。「喜びが満ちあふれるため」です。3 節からのつながりが大事です、「交わりのあるところに、喜び」があります。いわゆる私たちが「喜び」という言葉で誤解するのが、「幸せ」ですね。幸せは、環境や状況に拠りけりです。自分が心地よい環境にいれば、幸せと感ずります。けれども、喜びは、たとえ最悪の環境の中にも、それでも喜んでいられます。パウロは、使徒たちの生活が、「悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり(Ⅱコリ 6:10)」と言っています。感情よりも、ずっと深い部分です。キリスト教の葬儀はまさに、それが表れています。自分の愛している人がいなくなったのですから、とてもさみしいです。けれども、喜んでいます。その人が今は、イエス様のところにいることを知っているからです。

私たちは、御父と御子との関わりの中で喜びを持っています。ゆえに、神は悲しいことが起こっても、それでも共にいて、変わることはない方で、良い方であり、すべてを益に変えてくださる方なので、この方がおられるということで慰めを受け、喜んでいられるのです。また、主のみこころを行えているという喜びが、困難の中にあっても喜びがあふれるのです。ここでの交わりは、何か自分のやりたいことを祈って、願いを聞いてもらって、喜んだとかいう表面的なものではありません。御子イエス様に、すべてを明け渡すということ。またイエス様の言われることに、自分を捨てて聞き従うということ。どんなことがあっても、それでも神がおられると信ずること。そういったところで、イエス様がそばにおられることを実感し、それで喜びが途切れることなく与えられることがわかります。それから、互いに交わることに喜びがあります。

そこには、共に一つになれていることの喜びがあります。「詩 133:1 見よ。なんという幸せ、なんという楽しさだろう。兄弟たちが一つになって、ともに生きることは。」使徒たちの手紙には、「互いに」という言葉がたくさんあります。互いに愛し合いなさい。互いに仕え合いなさい。互いに訓戒しなさい。互いに励ましなさい。互いに賛美をもって歌を歌いなさい。互いにという関わりの中で、喜びと楽しみが増します。キリストにあって一つになっているからです。

そして、ここでの喜びは、単なる喜びではありません、「喜びが満ちあふれるためです」とありま

す。ヨハネは福音書で、何度となく、満ち溢れることを語りました。バプテスマのヨハネが、花婿なるキリストが来られたことについて、「3:29 花婿の声を聞いて大いに喜びます。ですから、私もその喜びに満ちあふれます。」と言いました。主の声を聞いている所には、喜びが満ち溢れます。そして、イエス様の言われていることに留まっている時に、満ち溢れた喜びがあります。「ヨハ 15:10-11 わたしがわたしの父の戒めを守って、父の愛にとどまっているのと同じように、あなたがたもわたしの戒めを守るなら、わたしの愛にとどまっているのです。わたしの喜びがあなたがたのうちにあり、あなたがたが喜びで満ちあふれるようになるために、わたしはこれらのことをあなたがたに話しました。」祈り求めて、聞かれる時にも、喜びが溢れます。「ヨハ 16:24 今まで、あなたがたは、わたしの名によって何も求めたことはありません。求めなさい。そうすれば受けます。あなたがたの喜びが満ちあふれるようになるためです。」

私たちは、楽しみや幸せを求めて、いろいろなものを探します。けれども、結局はここにしかありません。イエス様のところにいる喜びです。「詩 16:11 あなたは私にいのちの道を知らせてくださいます。満ち足りた喜びが、あなたの御前にあり、楽しみが、あなたの右にとこしえにあります。」これから、第一の手紙を通して、真の喜びを手に入れていきたいと思えます。